

Powered by Vivliostyle

文体操舵録

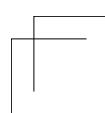
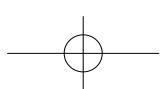
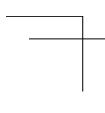
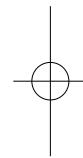
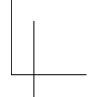
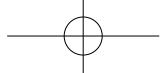


『文体の舵を取れ』練習問題の手帳

ayhy

この本は『文体の舵をとれ ル=グウィンの小説教室』(2021)の課題を一個人が実施したものをまとめた制作物です。版元とは一切の関係がありません。

この作品はフィクションです。作中に登場する人物、団体、場所、出来事はすべて架空のものであり、実在する人物、場所、出来事とは一切の関係がありません。



目次

自分の文のひびき	16
序	15
問一	14
問二	12
句読点と文法	12
問一 サラマーゴのつもりで	10
文の長さと複雑な表現	10
問一 短文	8
問二 長文	7
追加問題（別視点）	7
追加問題（別視点）	7
共通問題（交換）	7
共通問題（交換）	7
繰り返し表現	17
問一 単語の繰り返し	17
問二 構造の繰り返し	17
形容詞と副詞	17
人称と時制	22
三人称、現在時制	22
一人称、今…現在時制／かつて…現在時制	22
視点と語りの声	22
問一 三人称限定①	24
問一 三人称限定②	28
問二 遠隔型の語り手	28
問三 傍観型の語り手	28
問四 潜入型の語り手	32

視点人物の切り替え

問一（明示的な視点遷移）

問二（非明示的な視点遷移）

直接言わない語り

問一 会話劇

問三 ①（人物）

問三 ②（事柄）

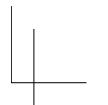
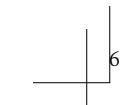
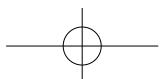
追加問題 ①（空想のダマ）

詰め込みと跳躍

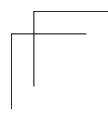
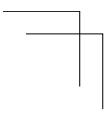
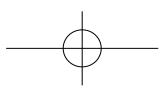
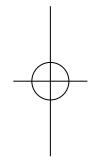
六章改稿

49 47 43 42 41 39 39 36 35 35

合評会で、一緒に心より御礼申し上げます。



文
体
操
舵
錄



自分の文のひびき

◆序

書かれた文に意図を説明するのは野暮と言われていますが、ワークショップの本によつては美術展示の解説のように作者が予め作品と合わせて解説を出すことをセットとした合評会の設計もあります^[1]。その場合、本文が始まる前に書き手が意図を説明する紙面を設ければ、参加者は予断をもつて文章を読み、その意図が達成されたかという観点で突っ込んだ合評になります。本文の後に置く場合は合評へのレスポンス、読み手への答え合わせになるでしょう。

一章の第一問、第二問とやつている間はとにかく手

探りで何も考える余裕がなかつたのが正直なところです。

◆問一

立ち去るころになつて、あの子に大したことができるなかつたつて思い知らされる。胃だけは同じ位置から動かないくらいだ。遠ざかっているはずなのに、塔にひつかかつたままの焦げた気球がいつになつても小さくならない。だから目を逸らすように下に向いて、鞆を開けて、こうやつて新しいノートを開く羽目になつている。どう考へても、何かを書くのに向いた環境じやないんだけど。取り消し線を沢山引きながら、なんとか「いい思い出になつた」つて話せる台本を作つて

[1] “The anti-racist writing workshop the anti-racist writing workshop” (F. R. Chavez, 2021) など

いるのかも。鞄に詰まつた黒革の、苛立ちを毎日みた
いにぶつけた日記と、市長の手元のレコードがあるか
ぎりは、本当のことはすぐわかるけど。起きなかつた
ことを書く気はない。ただ何もかもが失敗した訳じや
ないし、日記だつて、起きたこと全部を書いているわ
けでもないだろう？

もつと上手くやれたはずだつた、というのは正直な
気持ち。でも、多分、視点を変えれば、そんなに悪い
話じやなかつたとも思うんだ。火トカゲのマーサが始
めて熱気球を打ち上げたときのことは。

問二

隣島への繋ぎ橋はまだ、上り坂のままである。
白蛟の子は飛び上がり、沈みこんでは床板を蹴り、
海面から躍り出る。全身は届かなかつた。上体の
龍紗から水が抜け落ちては、膚をべたりと取り囲み、
水面を叩いては緩んで広がつた。ふたたび白蛟が床板

を蹴れば、跳ねとんだ下肢は陽ざしの下、床板へ向か
う弧になる。龍紗が吐き出した水は、こんどは橋桁を
濡らし伝いながら海面へと戻つた。跳ねた白蛟を空気
は支えない。床板は白蛟のを強かに打ち付けたが、閉
じた龍紗が下肢を保護していた。それでも白蛟の子は
痛みによろめき、まろびながらも肢を整えては橋の上、
隣島への道を渡る。その内側は、まだ空洞のはずであ
る。中身は白蛟たちの島に吐き出されて、混ざりあつ
ては新しい色を得る。ひとたびうつろになれば、島は
空気に招かれて浮き上がる。がらんどうの島を見上げ
れば、死んだ珊瑚も同然に色あせていた。いま空気の
側から、坂を登り切つて見下ろすなら、白と灰でない
濃淡を認めるだろう。水面近くの白藍でも、深みの溶
けていく紺青でもなく、水の纏う色ではない。生きた
珊瑚の浮き上がるような赤とも黄とも緑ともつかない。
空気の中で育つ藻と珊瑚が隣島の殻を覆い、白蛟が見

たことのない色と形で手招きするように揺れていた。隣島に中身が戻り、橋が下り坂になるのはずっと先のはずである。白蛟の、ましてや子ひとりの重さでは沈むまい。白蛟は意を決すると、肢を揺らして殻のふちにかけた。

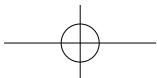
句読点と文法

◆ 問一 サラマーゴのつもりで

天地開闢いらい日の入りのあとは暗いと決まつて、いにこの真っ青に綿巡らした空ときたら何が起きて、いるのかお天道様に双子がいたのかそれとも卵みたいに黄身が割れて中身の光が残つちまたのか鶏小屋から興奮したわめき声がガアガア聞こえる確かにこんなザマじや夜明けを告げる鳥もお役目御免になつちまうし鶏にもそう見えてるつてなら俺ひとりの目がおかしいわけじやねえそのはずだと役場まで出向けば平助は外も見ずに日が長いと遅くでも書が読めて助かるとか抜かすこれだから都あがりは頼りにならねえと外に引つ張り出したら村の衆もワラワラ集まる厳めしい顔に取り囲まれてか昼先みたいな空かどつちかを見て奴さんの顔も真っ青平助は役場の隣の平屋に駆け込んでは

蜂屋老どうか知恵をお貸しくださいと泣きつく声が聞こえて若い衆が押し入れば蜂屋老いつものしかめつ面にますます磨きがかかつて口はへの字に突き出して黒い麻織の布地を何反も床の間に積み重ねては数えて算盤を弾いて渋い顔平助が納屋から更に積み重ねてもにこりともせずに街の衆には竹を取つてこいというまごつく衆に眉間の皺は更に深うなつて今にも算盤を投げつけてきそうな剣呑さで平屋が鉄火場みたいになる時に平助がもごもごしながら夜を架け直してお天道様を直すにはそうするしかないんですよ分かつてくださいよと情けない声で言い足すもんだから拳を振り上げかけた若い衆もあつけにとられいつとう血の気の早い四郎は代わりに平助の胸ぐらを掴み上げてどういうことだと言いつのるが平助はわかつてくださいよと埒が明かねえ蜂屋老は頷いてるもんだから信じない訳にはいかねえと若い衆は渋々竹を取りに出て行つた。

◆
とりあえず語りの型の一つであるべらんめえ講談調
の力を借りてなんとか乗り切つたやつです。型という
のは内容を束縛するので、これを自分の話で使える
か：みたいな観点が抜けていて、安きに流れた感はあ
る（というか余力がなかった）。他の参加者はそのあ
たりを自力で突破していたの自分の安易さにわりと恥
じ入つた。この型の力を借りてなんとか突破するハッ
クの類いは振り返つてみると濫用していた趣がありま
す。



文の長さと複雑な表現

◆ 問一 短文

エレベーターが死んで十年経つ。今でも電気で動かしてはいる。だが、腐敗は進行しているのだ。ケーブルはたわみ虫がたかる。釣り合い重りから浸潤液が漏れる。傾いていただけの軸も捻れてきた。固定乗員室が行けない階も増えた。大きく捻れた階は配送が滞りがちだ。不満は高まつたが手詰まりだつた。不定形乗員室の多くは既に高齢だ。体が硬く身を捻るのは負担になる。乗員室を更に増やす必要があつた。各階で乗員室のお見合いが行われた。だが若い不定形乗員室は纖細だ。单にそれ違うのとお見合いは違う。子供が生まれるなんて先の話だ。階の住人は口々に嘆いた。これでは通販業者を続けられない。エレベーターも雌雄で建てたかった。

◆ 問二 長文

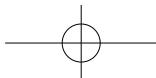
野原に浮かび上がる数多の水晶は蛇の鱗のようにきらめいて一面に広がる夜空に見える時もあつたが、今は群雲の後ろから瞼に照らす月光が夜空の背景としてはいささか奇異にも見えるだろうし、水晶を通る光の大半は野原に立つ者の視界に届くことはないのだから薄雲を貫く黒い輝点のような反転した光景になつて、代わりに光は野原の一点に投げかけられており、その水晶の曲面を通つた光は撓められて輪になり、輪が大量に投げ込まれた輪投げの的めいて一点に注ぎ続けられて、的の代わりに立つのは一輪の薔が硬く閉じてただ薺が夜の風にかすかにそいで行きつ戻り、風は男が雲の晴れ間を期待させるに十分だったので男はまだ雲間を待つてゐるのだ、群雲に散らされた月光は弱いが、だが天候は中空に何千と磨き上げられた水晶を浮かべる魔術師たる男にしてもたやすく支配の及ぶ相手

ではなく、夜ごとに呪文を唱えて曇り空に水晶を浮かべては日が昇ることを繰り返し続け、魔術師の才覚のひとつである執念深さにしたところで忍耐が薄く伸びて千切れそうになることは避けられず、呪文を唱える度に吐き捨てるような調子を帶びていったが、しかし男はやはり諦めの悪かったので夜ごとに同じ呪文を繰り返してそれが上弦下弦満月新月でさえ続けていたのはもはやその花に賭ける意地といつてよく、背丈の低い草しか生えない原にただ浮かび上がるよう立つ一輪の花弁は誰も知りようがなく、常緑の薔薇を閉ざしたまま数百の時を超えたという、その決して咲くことのないひまわりは日の光では咲かないのだという、ただ陽鏡たる月が照らす一條だけを求めて咲く時を待つているという言い伝えが本当なのかは知らないが、男が月光を曲げて注ぎ続けたことでその薔薇が膨らんでいるのは確かで、そして男はただひたすらに月光を注ぎ開

花を待つ。

◆ 追加問題（別視点）問一

貴方、本も何も持つてきてないの？ こここのエレベーター待ちは長いわよ。下で降りてくる音が聞こえるでしょう？ この階まで上がつてこれないので。あら、階から来たばかりなんて。ここに来るのも大変だつたでしょう。こんなに捻れた階だものね。キューブキヤビンは通れないから。でも私はスライムキヤビンは苦手。中は広くないし、紙の本は濡れるし。お見合い中のスライム見たことある？ 私あるわ、しかも中から見てたの。そつちのスライム中の人と目が合つて。気まずいったらなかつたわ。今どの階でもこんな感じじゃない。スライムの子供を作ろうとしてて。全部スライムにすれば待ち時間も減るから。でもあの空気に放り込まれるのはねえ。



◆ 追加問題（別視点）問二

人どころか獸も姿を見せない手つかずの野原には人が名付けたこともない草が生え、点在する密集した草むらではただ風がその葉を揺らすのに身を任せてかすかなざめき聞こえ、それが原野を渡つていき、月光が雲間を通り抜けその光を弱めながらも地表に辿り着いて葉へ触れて照らすのに身を任せていたが、月光の全てが日中の日差しのように平等に草の葉へ触れた訳ではなく、その大半は途中で向きを変え、厳密には磨き上げられた卵形の水晶、あるいはレンズ豆のようなガラスとでも呼ぶべきものを通じて光路をねじ曲げられて、原野の一点——視線を吸い寄せるように際だつ一地点——に向かうよう、自然の法則を欺く意図の介在を経て、その中心点、草地の中にあつてただ一つ背をぴんと伸ばし、青白い月の光に照らされてもなお夏の日差しの下かと錯覚させるよほどの生氣に満ち

た緑を湛え、開花の美しさを約束された一輪の花は、しかし伝承や伝説に語られるもののようには振る舞わず、秘儀を修めてどれほど時間が経つたのか、本人さえも知らないと『時間の前』の古老が彼——水晶の業を修め、光に通じた大学徒のひとり——に語つた物語さえも裏切つて、未だその開花の兆しを確かに見せることなく、かすかに色づいたかのように見えた緑の緑も目のあやに過ぎず、膨らんだような蕾も願望が見せた幻に過ぎないのか、男の献身——あるいは取り憑かれたかのごとき病的な渴望——を一顧だにすること底なしに月光を呑み込み、さらなる光を求めて頭を上げ、群雲に遮られた弱い光にさなながら足りないと普遍を漏らしていると男に錯覚させるように揺れ、男はこの満月と群雲の夜もまた光路を操る業を驅り、現れる花に請われるままに咲くことのない蕾を照らしている。

◆ 共通問題（交換）問一

最終的にこの開発計画は失敗だったという結論になるだろうが、その判断が固まるのは第三世代エレベーターの経済圏がなくなり、第四、第五世代エレベーターに入類の居住環境が移った後になるのだろうし、第三世代まったく中の人間であるなら失敗だろうが何だろうが手持ちのものでやりくりせざるを得ず、それはエレベーターの死体に無理矢理通電して部分的に機能する箇所を動かす、つまりエレベーターキヤビンの輸送を行うこともそのうちに含まれ、エレベーターが死んでから住人を脱出させるための緊急避難プロトコルだつたはずのものがいつのまにか惰性で運用されはじめ、それはエレベーターの腐敗（住人は腐敗とは呼ばず、ただ経年劣化と言うが）が目に見える形になってもなお、パルス電源で神経電位を模擬して階の扉を開け、自律移動する乗客輸送キヤビンを送り込み普段の

生活を維持したが、それはキヤビンが腐敗組織に絡め取られて階が不通になるリスクを常に抱えていたし、それらを解決する不定形型生体乗客輸送キヤビンにしたところで後知恵の提案で、場当たり式に問題を解決していくたところで一番多きい問題、つまりエレベーターが死んでいるという事実は住人には直視し難く、本来なら移住先を探すのが筋だが代わりに皆まだエレベーター経済圏を回す方法を考えていて、不定形生体乗客輸送キヤビンの生殖を許可することになったのもその手の逃避の産物であつた訳で、乗客が中にいることで生体キヤビンの重心が安定して求愛行動の成功率が上がる」と解つてからは乗客のクレームは握りつぶされ、今の居心地の悪さは将来の快適なエレベーター圏の復活となるのだから耐えるという風潮になり、本来ならばエレベーター 자체が生殖して代替わりするはずだという予算で実現できなかつた現実を見ないように

していた。

◆ 共通問題（交換）問二

人里離れた野原にそれはあつた。周りで野草が風に揺られて歌う。聞く獣はおらず、人は耳を貸さない。雲を透かした月光が原野に注いでいる。原野に立ち男が呪文を唱えた。水晶が飛び立ち、原野は俄に暗くなる。水晶が月光をねじ曲げたのだ。光のすべてが一点に収束する。原野の中央に立つ一輪の薔へに向かう。輪郭が闇の中に浮かび上がった。鮮やかな緑に開花の兆しはない。男は月光で咲く向日葵の色を考えた。男は確かめられる日を祈つた。先週も先月も同じ緑色をしていた。いつになつたらこの花は咲くのか。神秘の薔は何年もその姿だつた。

◆ 文法事項を縛るときついものの、題材は縛られていないので合評会ではいろんなものが読めて楽しかつた

文です。短い文章を連ねる場合、複数文で構築する最初の立ち上がりもかなり速を上げないといけない、というのが問一の気づき（提出したもののはちょっと遅かった）。問二はたしか英文でたまによくある情景描写のための関係節がひたすら並んでるタイプの長文を意識しながら書いていた気がします。

追加問題、共通問題で追加問題で視点人物を変えての語り替え、同じ物語を別のリズムで語る、といった部分が出てくるのは今思うと後半の章で取り扱う議題に触れていて、そのための助走であつた気もします。

繰り返し表現

◆問一 単語の繰り返し

遠くからよく来なさって、と大母母が感激したよう
に言うので、両親は恐縮し、有紀もならつてうつむく。
有紀の家は大母母の家から車で一小時間もかからない
のに。耳が遠くなつて場所を聞き違えたのか、いや、
近くの親戚にも遠くの親戚にも同じことを言つている
のが漏れ聞こえる。決まり文句などと有紀は思つた。
親類が客間に車座になつて、中央に大母母が座つて供
養が始まる。香の煙とろうそくの火が映り込む大母母
の瞳の中には距離がなく、時間がなく、死せるものと
死にゆくものが同じように映り移ろう。それが見るも
のは有紀にはあまりにも遠い。このヒトは本当なら気
が遠くなるほどの遠くに在るはずなのだと悟り、有紀
の背筋が自然と伸びた。

龍の卵を売りに客が来た。黒衣の外套を室内でも外

◆問二 構造の繰り返し

龍の卵を売りに客が来た。もちろん本物の龍ではない。龍の陽気を浴びれば禽獸おしなべて孕み、しかし凝つた陽気は龍の魂を宿すにはあまりにも小さすぎる。脆弱い禽獸であればその重みに耐えかねて最後に陽気の塊だけが残る。客が持ち込んだのは鶏から生まれた龍の卵だつた。拳大の完全な卵で、内側に透ける呪力の凝りは雛の姿にも似ている。客はこれは絶対に雛が孵る、龍の雛だと主張したが、そんなことをが起これば博物誌に名前を載せることができるだろう。激高させない程度になんとか上手く話を引き戻して適正価格を提示すると、客は不満を隠さなかつたが、最終的には折れた。卵を産む雛に死なれてはこの先困ることは間違いない。できる限り高く売りたいという立場は理解するが、こちらにも生活というものがある。

さない男で、本物の龍の卵の欠片を手に入れたという。持ち込んだだざさぎざの破片に宿る異様な呪力のことからして、その可能性は高い。しかし本物の龍の卵を碎いたというなら、宿るべき龍の魂はどこへ向かつたというのだ？　生まれる前の龍を殺すことは龍殺しではないが、しかしギルドに報告しておかなければならないだろう。正確な鑑定をしないと値段がつけられない、すぐには買い取れないで後日また連絡すると告げ、男の逗留する宿を控えた。できることなら、出所の怪しい商品には関わりたくないものだ。

龍の卵を売りに客が来た。金髪が汗で額に張り付き、額を紅潮させて駆け込んできた。だが小さな両手が握りしめる小石からは立ち上る呪力はなく、中にきらめく赤はただの酸化鉄であることは一目明確である。そう言うと今にも泣き出しそうな顔になつたので、仕方なく馴染みの宝石商への紹介状を書いた。宝飾品用にするには不純物が多すぎるが、カンテラオパールは原石でもそれなりの値で売れる。宝石商の買い取り価格と売り出し価格の落差は大きいが、子供のお小遣いには十分すぎるだろう。

思わずいらつしやいませと声をかけそうになつたが、龍の卵を売りに来た客ではなかつた。配達を頼んでい

するならば、この卵は二束三文で売り払われるだろう。しかし二界を跨ぐ両生類の呪物にはつねに需要があり、その分は割り増しされる。客は拍子抜けしたような顔で代金を受け取つていつた。

龍の卵を売りに客が来た。金髪が汗で額に張り付き、額を紅潮させて駆け込んできた。だが小さな両手が握りしめる小石からは立ち上る呪力はなく、中にきらめく赤はただの酸化鉄であることは一目明確である。そう言うと今にも泣き出しそうな顔になつたので、仕方なく馴染みの宝石商への紹介状を書いた。宝飾品用にするには不純物が多すぎるが、カンテラオパールは原石でもそれなりの値で売れる。宝石商の買い取り価格と売り出し価格の落差は大きいが、子供のお小遣いには十分すぎるだろう。

たピザ屋である。匂いの時点で察するべきだった。雑に箱を置いて立ち去る宅配員を尻目に開ける。トッピングのパイナップルは乾いてつややかな光沢を複雑な起伏の上に晒し、割れた龍の卵に見える。思わず値段を数えそうになつて思いとどまつた。職業病が過ぎる。

◆
龍の卵を売りに客が来た。呪力の甘い香りが客が一歩足を踏み入れた瞬間から鼻をついた。持ち込まれたのは一抱えのダチョウの卵状の塊で、むきだしでカウンターに置かれると、台座の石に少し沈みこんで形を変える。内側から照らされるような光、そのやわらかな黄色と、甘い香り、繊維状に走る筋——これはマングールだ。間違いない。そして龍の卵だつだ。

問一は多義語を使って答える抜け道でなんとか、問二は繰り返しそのものが物語の構成となる、英語圏二次創作における5+1フォーマットを意識しています。

合評会では繰り返しにダンスマジック的な言及があつたのですが、SNSでたまに流れてくるで、動物の鳴き声のループに楽器奏者の伴奏がループごとに増えていくような動画っぽい気もしてきました。

形容詞と副詞



夕日の名残が立ち去れば、隙間から流れ込んだ夜が滲んで広がる。タイムラプスのビデオで成長するキノコの挙動で、夜市の屋台が増殖していく。たこ焼きお面ブリトーに、カリーヴルストに硯と鏡、点心、ファラフェル、ドリームキヤツチャ。あちこちで立て看板とお品書きを出し、屋台は石畳に車の往来を封じて並ぶ。日没直後ともあってか、路地をうろつくのは客よりも店員だ。この夜市はガイドブックには載っていないが、解説文は命知らずの興味しか惹かないだろう。

たこ焼きのタコが本当は何を茹でているのか、割り開いて知りたがるような連中をだ。肝試し連中はクレープを買い、射的をし、吊された灯籠をついて街路を賑やかす。けれど、脇目も振らずに口元を引き結んで歩く、自分が何を買うか解っている客が夜市の本命だ。対価さえあれば、夜市は何であれ提供する。求めるものを見つかる。そこにあるのは客と店の一対一の関係だけで、そんな客にとつてそれ以外は全通り過ぎる幻に過ぎない。彼はそのどちらにも当てはまらない。路地を行つては戻り、四つ辻に入つて一ブロックを周り、隣の道から同じ夜市の中へ入り、店員たちの気を引かぬよう通り過ぎる。同じ区画を何度も経路を地図に書き記せば、中心がどこかは一目瞭然だつた。何度目のかの往来の途中、葉膳茶のフードトラックから降りる人影を見て、彼の足は地面に縫い付けられる。買ったお茶をすすりながら、店仕舞いを待つていたのは去年の話だ。零れる明かりに照らされた緑の指先、あのひとは今年もいるだろうか。物見遊山の笑い声が背後から近付き、通り過ぎ、遠ざかる。人影が曲がり角に消えた後も、彼は動けずにいた。

◆形容詞と副詞を縛つても副詞節関係節、熟語表現等をゴリゴリに使えば実際回避できる、という感じで作った奴です。それがルゲイン先生の意図に沿うのかはよくわかりません。合評会では私のようなハック寄りからそのあたりも厳しく縛つた人まで幅がありました。

人称と時制

◆ 三人称、現在時制

簾巻を第一対の押手に、引手に糸車を回す。糸車と糸の合間の緊張を爪先に受けながら節々が曲がり、ゆつくりと引いていく。硬く芯材に巻き込まれた綿が引き延ばされて爪の上を滑り、糸車へと延びながら連なる。老婆の爪は欠けていたが、もつれた纖維と爪から生える毛が交わることはなく、爪の合間に挟まれた撲糸は糸車へ回り、紡錘の螺旋に加わる。節が目立つ腕の輪郭は色あせ、乾いたひび割れが表面を走る。時間の糸を紡ぎ叙事詩を編む老いた蜘蛛は、若かつた頃も美しかった頃もなく、いと高き神々に仕える婢女はしための責を果たす。

第二対の弓手は大釜をつついで揺らし、煮え立つ骸から染み出す感情が緋に紺碧に黄銅に糸を染め上げる。

馬手の爪が染まり切った糸を順繰りに取り出すと、糸を濡らす薬湯は釜にとどまり渦巻く。鍋底には、物語の芯に届かぬ色だけが残る。

薬湯に映るはのぞき込む老婆にあらず、代わりに女の像を結ぶ。掬い上げられなかつた祈りが薬湯の中によどみ、老婆はありえぬ過去を思い描く。蜘蛛の女王は銀嶺に走るひびわれを巢に、居並ぶ子供たちに告げる——何人たりともこの稜線を越えさせはしない。背を伸ばし頭を高く掲げ、山間に日が落ちるのを見たのはいつのことであつたか？ 輝く鎧が蜘蛛の糸に絡め取られ、身もだえのたびに朝露のようにつらめ、そして少しづつ光を失つていつたのは？ いかな神々たろうともこの地を踏みにじらせはしない。それは綴られぬ物語だ。存在しない追憶だ。いまだにその決意が老婆に内側から火を灯すとしても。

その合間にも、第三対は引き上げられた糸を受け取



り、忙しなく糸巻きに巻き付けては縦糸の間に挟むよう置いていく。

第四対の弓手は木枠の合間に体節を曲げて縦糸の合間に糸を通し、馬手の爪先で横糸を整えながら無数の色を載せる。怒りと炎の緋は悲哀の藍の傍らにあっていつそう鮮やかに、祝福を告げる黄銅の金糸に似た光沢に縁取られ、威風堂々と高き神々の勝利を告げる。

第三対に糸を明け渡し、重みから解放された第二対の爪先^{タペストリ}が迷うように木枠を滑った。爪先の薬湯^{タマシマ}が織りかけの綴織に滴る。木枠の向こう側の図案を変えるには及ばず、かすかに色を翳らせるだけだ。それは誇るべき輝かしい勝利のままで、ただ染みのかたちは老婆に、高き神々が打ち倒した同胞たちに、ひとつ光景を呼び起こすだろう。炎と煙が山間を埋め、輝く鎧が煙りの合間にちらつき、千切れた歩脚を靴裏にまとわせて歩く姿を。そこでは木の爆ぜる音に混じつて呻

き声が幾重にも唱和する。勝利を祝ぐ歌にひそみ、在ることを許されぬ場所に、その痛みは反響する。

老婆に繋がる因果の糸は断ち切られ、数多の逸話は大釜に沈む。来歴を奪われた蜘蛛は神々の鋳型のままにある。それでも第二対の馬手はいつも、渦巻く色を掬い取るように揺らし、語られぬ物語に濡れている。

いまも、これからも、いままでも。

◆ 一人称、今..現在時制／かつて..現在時制

いと高き御方、この糸車が一回転する間、糸巻きが縦糸を通りすぎる間に、その威光はさらに広がり照らすことでしょう。わたくしの爪はあまりにも不器用でどれほど技巧を尽くしても偉業をお伝えするには足りないでしょう。たとえ四対備えたところで、御方のように指を自在に操れるわけではありません。

けれどわたくしとて糸繰りには親しんだ蜘蛛でござ

います。時紡ぎ、語織りに携わるのは望外の喜びであり、譲れぬ役割でございます。わたくしの爪を辿る糸は吐く糸とは異なれど、数多の物語に連なる糸が爪先を擦るのはこそばゆくも誇らしい。

染糸の知識は生来のものではございませんから、鮮やかに染まる色にはいつも息を呑みます。この大釜は一体どれだけの色を煮立てるのか、ひとつずつ薬湯で糸は無数の色に分かれても、わたくしの爪に残る水滴は灰と黒ばかり。

糸を引き上げるときに、よくのぞき込むのでござります。けれど大釜はそのたびに歪んだ水鏡に転じたのです。わたくしではない顔が、見知らぬ景色を背に立っていました。彼女はわたくしと同じ蜘蛛ではありませんが、はるかに美しく力強く、内側からの活力に溢れて——見てているだけでも、その生気がわたくしの内に入つてくるようでした。若さとはそのような力な

のでしょうか？　そして決意に満ちていました。眷属の蜘蛛を従え、まるで戦いに赴くよう。わたくしに授けられた語織りの物語にはない戦いです。そのようなことができごとがあつたのでしょうか？

気にして仕方のないことです。これから起きたことかもしませんから。きっと御方と共に偉大な武功を挙げたのでしょう、今ちょうど織つている物語のようだ。これは蜘蛛の脚一対だけでは足りません。引き上げた糸を色ごとに糸巻きに巻いて、それで色を作る横糸を別の爪が引き受けるのです。

そうして色が縦糸の間をうねれば、少しずつその形が現れてきます。この赤い糸巻きも、天にあれば燃え盛る火、地にあれば流れる血の彩になつて——ああ、爪が滑つて——よかつた、表には染みていない。今までの糸を全て取り替えればまた遅れてしまします。御方をこれ以上煩わせる訳にも参りません。この図柄



は早く終わらせないと。

語織りとして、目指すべき図柄をわたくしは知っています。けれどかたちを知つてのことと、現れたかたちを目にすることは全く別のものです。高き御方の怒りは天に届く炎となつて燃えたと、いかな小細工も踏み碎いたとこのかたちが何より雄弁に物語るでしょう。けれどわたくしは、地に横たわった骸に目を奪われてしまう。御方の剣が地を割つたその深い亀裂のほうが、わたくしが居た場所だつたでしょう。ええ、詮無い気の迷いです。早く終わらせて次の図柄に取りかかるべきなのです。

語織りの蜘蛛に、それ以外に気に掛けるものなどありません。けれど不思議に思うのです。あの鮮やかに糸を染め上げる大釜に、なぜ灰と黒が淀んでいるのかと。

◆
老婆……老婆って何？ というあたりから始まり、神話的な年齢のないものの老婆を描写すれば課題をハックできるかもしれない……みたいな気持ちで書いたやつです。これはハックできなかつた。糸を撫つてタペストリを編む工程は一応実在のものを参考にしています。

視点と語りの声

◆問一 三人称限定①

しゅわん、と風を切る音がする。低いぶーんという唸りに重なって、周期的に繰り返す。メトロノームみたいに正確で、テストのときの秒針みたいに耳に突き刺さる。行列を進んでいくたびに、音は大きくなつていく。

列の先では、男がトランボリンに向かつて小走りに駆けていった。沈み込んで大きく跳ねて、中空でふわりと髪が逆立つあいだに、足下を半円リングが通り抜ける。隣のマットレスに着地して、男は出口に向かつて歩いていく。

回転する金属の半円リングをジャンプして通り抜けることは、悠にはまだ信じられない。
さつきまで並んでいた家族連れを悠は思い返した。

膝と手を着いた着地をまじまじと見る弟をねめつける。悠は口を引き結び、振り向いて円リングが回り続けるのを見た。
通り抜けた。無事に。みんなそうしてゐみたいに。

悠と大して歳も違わない子供は、あんなの無理、絶対やだと泣き叫び、挙句両親もスタッフも手を上げて、

バリアフリーの入場ゲートへ案内されていた。悠もそつちへ行きたかった。弟の手前でさえなければ。

でも弟はもう駆けだしていた。床面の矢印が点滅して先導する。大人だと大体三歩、弟の背丈ならだいたい五歩、つまり悠もそれぐらい。廊下を駆けるときのリズムで、そのまますつと跳んでしまう。列の先頭になるのも一瞬だった。考える暇もなく、息を止めて、駆けだして、視界が沈んで、跳ねて、ひゅんと風を切る音がずっと右から下から左から——そして膝に足にマットレスの感触。

でも内側から見えた半円リングの頑丈そうな枠の残像と、内側にずらりと並んだレンズ——あんなの、もしも転んだりして当たつたら。どうしてみんな平然としていられるの？

◆問一 三人称限定②

部屋には低いモーター音が響いていて、靴裏からでも力強さがわかる。啓が横に一步踏み出して列からずれると、綿シャツの背中の向こう側にフレーム基部と、その間をぐるりと回る銀色の残像がのぞく。このジャイロスコープモドキは本物みたいにくるくる向きを変えないし、リングも一本、それも半分だけだ。

でも——啓が見たことのある本物のジャイロスコープよりも、ずっと大きい。半円のフレームが一回転で描く球は啓が五人入つてもおつりがきそうだった。背中に感じる圧力に啓は振り返って、列に戻った。襟を引っ張る姉はいつもよりも不機嫌だ。こういうと

きの姉を刺激しないほうがいいことを、啓は経験から知っていた。仕方ないので列から動かずに、首を伸ばして向こう側を見ようとする。

助走をつけてジャンプすると、半円のフレームがまわりを一回転して球をつくる。人が跳ぶとできる球はバリアみたいだ。自分の番が来たときのことを、啓は考える。ちゃんとバリアの中心にいるだろうか？

家族の一団が列から抜けで列が一気に進む。視界を遮るシャツの背中が減る。装置が遮られずに見える。啓は駆けだしていた。

トランボリンのばねで高くジャンプする。浮遊感と回転するフレームのなめらかな音、フレームの内側でレンズがきらきらしている、その全部がコマ送りで感じられる。バリアってこういうことなんだ。次の人までの期間限定だけど。

着地した啓が出口に向かつて歩きだすと、ぼんと

いう柔らかい音がした。姉だ。着地を失敗した姉と目が合うのはなんだか気まずい。顔をそらした姉に向かって、啓は口をとがらせる。早く出口行こうよ。

◆問二 遠隔型の語り手

サイクルキヤブチャ◎のアーチが回っている。地球儀の弓を思い起こさせる半円の金属アーチは、差し向かい5メートルに設置された軸受けで水平に保持され、毎分回転84～48の範囲で回転している。

サイクルキヤブチャ◎は、対象が動いてくるのを——内部へ飛びこむことを要求する。図式としては大繩跳びに近い。附帯設備の可動トランポリンは、そこに踏み込んだ人間の重量と慣性を測定制御し、一定の加速度になるよう補正して回転部へと打ち上げる。アーチ内側の高的速度カメラは一回転で300～400枚の人体を撮像する。サイクルキヤブチャ◎は《再構成圏内》に突入する際の速度から映像中の重心位置を補正し、

カメラ映像から三次元形状を再構成する。

80個のカメラを持する金属アーチの回転体は、当然ながら事故の可能性で物議を醸した。だが一度に人を擲げる速度は同様のスキナーの追随を許さず、《生身のような没入感》をうたうVRアミューズメント施設においてはほぼ必須の設備と化している。サイクルキヤブチャ◎へ飛び込む親子連れも、年齢制限を超えたばかりの子供たちも、何事もない顔をして回転する銀の大繩へ飛びこみ、スキヤンを終えて出ていく。モーションセンサはトランポリンとアーチ部へ近づく人間を検知し静止するよう設定されており、緊急停止ボタンの本来の使用者である常駐保安員のやることはない。安全性に懸念を示す親や、怖がつてジャンプできない子供たち、飛びこむ動きが困難な利用者を低速の静止スキヤン設備へ案内するのが主な仕事になっている。

先週交換したばかりのアーチ部は、事前に苦情のあつた異音もなく、いまのところ安定していた。



ギミックとなるぶんぶん回つてる機材が何か、というのが問一段階では取りにくい（問二でわかった）といいう評をわりといただいた実作で、それはその通りだと思います。未知の情報を読者に提示することを目的とした場合、子供の視点を通して伝えるのは情報の整理がかなり大変だと思いました。



問三 傍観型の語り手

一日ぶり十六件目。私は部屋に響き渡るぎゃんぎゃんとした泣き声の発生源に、意を決して近づいた。この世の終わりのように泣き叫ぶ子供は、いつかの飛行機内のことと思い起させた。何が気に障ったのか、その子供は届かない床に地団駄する代わりに前面のシートを蹴りつけ続け——背中を椅子越しにリズミカ

ルに叩きつけられるのは、まあマッサージとでも思えたかもしれない。一睡もできなかつたけれど。着陸時に目が合つた両親の申し訳なさそうな表情は、今子供をなだめようとしている親が浮かべているのと同じものだ。

近づいてくる強面の制服を着た保安員、つまり私に威圧感を覚えたのか、彼らの顔が強張る。アミューズメントパークに入れずに門前払いされても今日一日の予定もたたないだろう。とはいって、私のような雇われ保安員に彼らを追い出すような権限はない。

少し時間がかかりますが、という前置きして告げるト、安堵した親が子供に声をかけ、子供は泣き腫らして赤くなつた目でこちらを見上げてくる。安心させるようにっこりと笑うと、私は部屋の端にある目立たないドアに向かつて親子連れを先導した。同シフトの高橋さんに目配せをしてドアを開け、そちらの大掛か

りな旧式スキャナの電源を入れる。

無事に親子が入場したのを見届けてドアから戻つてくると、ぼすんという大きな音がした。慌ててそちら側を振り返ると、マットレスにカエルのように潰れていた。反射的に支給のレシーバーに手が伸びるが、救護センターへのホットラインを繋ぐ前に女の子は立ち上がり、一緒に来たと思しき男の子と一緒に歩いていた。

私は息を吐き出した。この職場はあまり心臓によくない。

◆ 問四 潜入型の語り手

エントランスは殺風景で、出口ドアから覗くカラフルな電飾のような愛嬌はない。しかしそこは既にアミューズメントパークの園内である。

銀の半円リングが回っている。

その回る動きも、すでに入场料を払っているのだか

ら、アトラクションの一部と言えなくもない。それは非日常へと向かう装置で、来園者の期待を搔き立てる。

虹をくぐった先の魔法の国、霧を抜けた先の不思議の国、飾り立てられた非日常への門。銀の半円リングに並んだカメラがきらきらと照明を反射して、飛び込んだ大人の子供のスキヤンし、その現し身をデータ世界に送る。その動き自体が、日常生活では目にかけないものだ。VRアミューズメント施設では実際に体を動かす機会は多くない。このジャンプして飛び込むという動きは、たしかに一番大きなアトラクションであったかもしれない。

飛び込んでいく客を保安員が見守っている。踏み込み台代わりのトランポリンが打ち上げ角度と速度を補正するのでだいたいの人間はきれいに半円リングの描く球の中央を通る。しかし時折、勢いあまつた子供達や、おつかなびつくりすぎて勢いの足りない大人達は、

リングの外縁に近付いてしまう。並べられた複数点カメラでスキヤンデータを補正するので、多少変なボーズで飛び込もうがデータ構築を失敗することはない。しかし、彼らがうつかりカメラにかすつてレンズを汚しでもしたらそのスキヤナは半日はメンテに時間を取られる。保安員が指導されているのは、そのような事態を避けることだ。できるかぎりスキヤナの安定稼働時間を延ばして、沢山の客を捌く。そのためにはスキヤナを怖がる子供、うまく飛べそうにない大人、そういういたものを手短に別室へ案内することも含まれる。

マニュアルでは、別室扱いの客が出た時のためにペアで保安員を配置するよう記されている。

エントランスは殺風景で、撤去された機材の跡が黒ずんだ枠となつて残っている。アトラクションではないでの、広告用の園内写真もない。サイクルキヤプチ

ヤの導入事例としてカタログには載っているが、それは実際に運用される前の状態であった。当時の面影は当事者の記憶の中にある。それこそが、唐木田がこの場所を選んだ理由だった。

「わざわざこちらまでいらして頂き本当に感謝しております」

唐木田が振り返ると、機材の跡の染みから目線を上げて緑のジャケットの女性が頷いた。化粧でも、やつれた線を隠しきれてはいない。

「当日の様子を話していただけますか？」

無理もない。高橋という名の元従業員は、エントラنسのスキヤナールームとレセプションの両方を担当していた。当時のシフト表ではスキヤナールームにのみ割り当てられているが、事故が起きた時の第一応答者は彼女だつたのだ。もう一人の保安員、たしか宮垣といったかが部屋を外しているときの出来事だった。

まだサイクルキャプチャの開発元と、事故の責任をめぐる訴訟は続いている。唐木田がこの場で有効な証言を引き出すことができなければ、あと数年はもつれ込むだろう。高橋も唐木田も、そのシナリオは避けたかった。少なくともその点で、二人の利害は一致していた。

◆

余談ですが、書いているときは過去の回転ドア事故の事例が念頭にありました。回転体に人間を接触させるのは大変危険なので安全管理は徹底されるべきだし、こんなアホみたいなシステムの装置は人が死ぬ以前に即禁止されるものです。現実の3Dスキャン技術はかなり高速化しているので特段優位性もなさそうです。

視点人物の切り替え

◆問一（明示的な視点遷移）

揺れる炎はマリオンの横顔に揺らめく影を添えながら照らしていた。しろがねの兜に覆われていないとき、その下の表情はナルカが思い描いていたよりも柔らかくて、神域のオートマタや、年経たまじない師たちとおなじ厳めしさが刻み込まれているに違いないというナルカの予想は肩透かしを食らつたのだ。

もちろん野宿で火を囲むにはそちらのほうが気楽でいい。その表情は、マリオンがオートマタよりも、自分たちに近いのかもしれないとナルカに思わせる。オートマタの四肢と起源を同じくするしろがねの鎧は、まぎれもない神域の使いの証だ。けれども彼らは、自分たちはオートマタではないと主張するのだ。

ナルカが案内人を引き受けたのは、師たる老まじな

い師の目配せもあつたが——兜の下の顔をみていいなければ、断つていたかも知れない。

「眠れないのか？」

マリオンの視線は焚火ではなく、その向こうの暗闇をずっと見ていたはずだった。こちらに一瞥も投げずに降ってきた声に、ナルカは毛布の下で体をこわばらせた。気づかれないよう寒さを我慢してわざわざ遠くで横になつたし、重ね織りの毛布越しなのに。これじゃあただの寒がり損だ。

毛布の下の呼吸が一旦止まり、そして再開した。それを視界外の空間センサーで感知しながら、マリオンは細く長い溜息をついた。覚醒していくも、横になつて休んでいたほうが体力回復にはなる。彼我の稼働限界の差を考えれば、マリオンがずっと寝ずの番をしていたほうが合理的だ。

毛布が筒状に巻き付けられたの人間大の熱源が、尺

取虫のように蠕動しながら近づいてくる。

「寝ておいたほうがいいぞ」

「あつちは寒かつたから……」

もごもごと聞こえる言葉は尻すぼみになつて、規則正しい呼吸にとつてかわつた。

しろがねの鎧があつても、空は飛べないし山狩りは歩き回る羽目になるのだ。毛布の隙間からのぞくマリオンを見ると、ナルカは妙な親近感を覚える。視線が神経質に焚火から四方に走つては戻る。いくらしろがねの鎧の持ち主とはいえ、マリオンだって早く柔らかいベッドでぐっすり寝られるようになるといいのだけれど。

視界に映る天球の配置は、この星に配備される前の

ブリーフィングデータと寸分たがわない。

現地民が言うところのしろがねの鎧——ユージーンは、配備前に『獸』を取り逃して以来、不貞腐れて沈黙したままだ。マリオンは視線入力でHUDの端にあるユージーンへの接続モジュールをつついた。現地民に被害が出てからでは遅いのだ。



三人称でも視点人物が変わればものの見方は変わる。それは地の文に反映される、というのをやろうとした。その地の文の違いはSFやファンタジーなど互いの隔たりが大きい設定だと際立つと思います。地の文に視点人物の意識の流れを埋め込む奴がちょっと多すぎたかな……というのは合評会の指摘を通じて思いました。

◆ 問二（非明示的な視点遷移）

セマが持ち上げたぶどうの房はずしりと重い。けれ

ど中身が詰まつた弾力のあいだに、時折じくじくとにじむ切り傷が手のひらを湿らせる。今年はよく雨が降つたのだった。空いた手で皮の破れた粒を房から摘んで口に放り込む。どうせ店には出せないのだし、ちょっとぐらいなら父さんも何も言わないだろう。セマの指は止まらずぶどうの房へ滑り込み、離れ目走つた粒がてのひらで転がる。アリオの声が聞こえ、セマは振り返つた。傾いた西日がセマの右頬だけを焼く。残照に縁取られたセマの輪郭は、アリオの背丈より頭三つ分は高い。アリオが全身のばねで跳んでも届かないぶどう棚にも、あつさりと手が届くのだ。セマが手のひらを傾け、アリオは転がつた粒を両手で受け取る。さつきのセマの動きを真似てぶどうを頬張り、手のひらの赤い果汁を舐めとつた。アリオが口を閉じて見上げると、セマが口の端をにやりと上げて言う。

「内緒な」

口の中のぶどうを飲み込んでアリオは頷いた。裂果したぶどうは見つけるのが遅ければ腐りはじめているので、状態によらず見つけたら廃棄が原則だ。もちろん父はまだ大丈夫そうなのをより分けで自家製ワインにするが、アリオの口に入ることない。規格外のぶどうのうち、即座にダメとわかるものは投げ捨てればいい。たが裂け目が入つた程度では、匂いを嗅ぎ、色をためすすがめつしてもなお、悩ましいものはある。腐敗寸前の甘い香りは、収穫前に局所的に熟れた匂いで彼を悩ませていた。いつもプラムに、スグリに、木イチゴにするように、ジャムにしてしまえばいいじゃない。そう妻はなんでもないよう言うが、彼には頷けない提案だつた。それはぶどうの爽やかな香りを奪い甘つたるくしわがれたレーズンに貶めるような行為だ。この状態のぶどうの尊厳はワインにすることでしか救われない、それが父の信念だつた。だがセマに言わせ

れば、その場で食べる以上に、ぶどうを味わい、救う方法があるだろうか？アリオも同意見だつた——多分、ワインが飲める年齢になるまではセマに頷くだろう。

合評会でも分かりにくいと大評判（大失敗）だつた事例です。想定していた一回目の視点遷移は「傾いた西日がセマの右頬だけを焼く（セマの内在感覚の表現、三人称限定的な部分）→残照に縁取られたセマの輪郭は、アリオの背丈より頭三つ分は高い（セマを引いたカメラで見る、アリオ視点の表現）」だつたけれど、「引いた西日」を「焼く」の動作主体にしたために、おそらく遠いカメラで成立する描写となり、セマの近づくなるような視点遷移を際立たせられなかつた。多分、「傾いた西日が右半分にかかり、頬が火照る」といった、文主語をセマに付随するものへ限定し、か

つ感覺に関する述部にすればギリギリ成立したかもしない。しなかつたかもしれない。難しいものです。

直接言わない語り

◆問一 会話劇

A .. 聞いた？ 十六階の。

B .. 聞いた。

A .. ひどくない？

B .. ひどい。

A .. ヒロシだつてちゃんと準備してたのにさあ。

B .. アンタがヒロシに同情するつて相当だね。

A .. 話聞いてたんじやなかつたの。

B .. 学事の横やりで二〇階分落ちた話だけよ。詳しく

A .. それだけなら怒つてない。

B .. そうかなあ。皆学事の横暴には怒つてるじやん。

A .. そうよ。学事がヒロシの板金鎧を没収して廃棄に

したの。わたしの、わたしが作った奴!!

B .. 最近いなかつたのはヒロシ案件？ 手伝つてあげるなんて優しくなつたねえ。
A .. だつて進級かかつてるつて頼み込まれたらさあ、
B .. 進級？ 経済II？ ヒロシは十三階の学科長倒し
てるんだから立派に役目は果たした、でしょ？
A .. そりやエンチャント+4付ければ学科長なんて余裕よ。

流石に。

B .. 正直オーバーキルだねえ。でも+4あれば地下四

階からだつて戻れるよ。

A .. だからそれが取り上げられちゃつたんだつて。

あ。

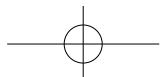
B .. あ？ ああ、そつか、うーん、丸腰で地下四階か

あー……まあ……なんとか……どうかな……うー

ん。

A .. 地下四階まで行つたことあるんでしょ？

B .. 行つたじやなくて行かされた、ね。ボランティア



- 云々で。予備生が常時講義室埋めるくらい湧くのはべつに捌けるけど、学部長が湧きに混じるから全然気が抜けなくてさあ、背後に学部長湧いた時は死ぬかと思つた。
- A .. そういう感じなの?
- B .. 講義室Aはむしろ楽な方だったかな。大講堂配置だつたみつちゃんは総長とも遭遇したって聞いたし、地下八階直通エレベーター前だつたユーリはピーク時がヤバいって言つてた。
- A .. 死にはしない感じ?
- B .. 武器没収されてないなら多分いけるよ。でもヤバいはヤバい。みつちゃんまだ帰つてきてないし。
- A .. え? みつちゃん、学籍あるけど最近動いてなかつたのって
- B .. あそこの大講堂、講義始まると一分がこっちの一か月だから逃げ切れないと結構大変。
- A .. 転部じゃなかつたんだ……七年は帰つてこれないじやない。
- B .. みつちゃんだしそれよりは早く抜けると思うけど、まあそういうこと。ヒロシは多分死なないと思うけど、んー、まあ……まあ大丈夫なんじやないかな
- A .. ヒロシはともかくみつちゃんはなんとかしなきや。行くわよ。
- B .. 今?
- A .. 今。
- ◆
- 手が滑つて板金鎧とか書いたのでそのまま学園物ダンジョンクロールに。情報の提示を会話のみで行う、という課題に対してせつかく台本形式なら台本っぽい表現がやりたいと脱線した結果でもあります。台詞のオウム返しとか、地の文で結構

省略して削つてしまいがちな部分の効果が分かつて面白かったです。

◆問三 ①(人物)

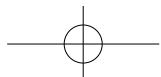
集成材のパネルには等間隔で打たれたグリッド線に従つて釣り下げフックが挿されている。その下では工具の吊す向きを示す輪郭がテープで描かれ、フックの落とす影がテープを横切る。色とりどりの蛍光色が貼り付けられたパネルは、遠目には沢山のクッキー型が刺さった生地のようにも見えるかもしれない。手前のパネルの向こうに居並ぶ三枚にも、同じように工具のシルエットが描かれているのだろう。

今パネルには工具は吊されておらず、中央の作業机にもなかった。机の上は丁寧に拭き取られ、板材の隙間に詰まつた木くずで机の表面が平らになつていて。作業机の隣で存在を主張する大きな赤い工具箱はいかにも重そうであり、四段ある引き出しはパネルの枚数

と同じである。金属の箱を動かした形跡はなく、代わりにパネルの足下から乾いた泥の軌道が延びていた。

パネルにはキースターがついているのだ。泥の軌道は複数の半径の円弧を組み合わせながら中央の作業机を取り囲み、ところどころ靴裏模様のプリントで上書きされている。靴裏模様は入り口、作業机、金属の箱、パネル、壁の棚を結ぶ一直線上を行き来していた。

壁に据え付けられた棚ではペール缶が並び、はみ出た木材の塊と油性ペンで書かれたラベルが中身を申し立てる。下段に40cm、30cm、25m、上段に20cm、15cm。上段の右端、ペール缶の隣は空いていたが、全く何もないわけではなかつた。握り拳大のころころとした形の木材は、削り残された太い棒と球での形状で手足と頭部を演出する。デフォルメの効いた丸い輪郭の熊ではあつたが、削り跡は傍目に分かる程度に荒い。整然とした部屋の中で木彫りの熊はひとりだけ絵



本から抜け出したような風情で寝転がり、紙やすりの上で横になっていた。

◆問三 ②(事柄)

戸棚には細いろうそくの束が転がっていた。色違ひのらせん飾りがついたろうそくは、以前は定期的に戸棚から取り出されていたが、そのストックはもう数本しか残っていないのだった。その隣の箱には数字の形に成型された色とりどりのろうそくが箱に入っている。すでに封は切られており、1から9まで順繰りにあるはずの数字のうち、水色の8だけが欠けている。

戸棚のガラスに金色が映り込む。ヘリウムが詰まつたメタリックバルーンは糸に引っ張られて玄関からキツチンを横切り、リビングルームへ流れていく。靴音は軽いが、飛び跳ねる動きは床と天井、釣り下げられたテープとモビールを揺らした。

リンの家の天井灯はあまり強くないので、ダイニン

グはそこまで明るくならない。そのかわりに、庭に通じるドアは網戸以外は全て開け放つて、カーテンも明るいオレンジのレースに取り替えられていた。リンの

お気に入りのスニーカーと同じ色だ。

ダイニングテーブルでは同じオレンジ色のテーブルクロスがかかっていて、既に人数分のナップキンとコップが並べてある。

今日は朝からずっと、オーブンで肉が焼ける匂いがしていた。



強い型に従うと強い型の力を借りられます。今回の②とかは特にそう。そう考えると書きたいシーンをうまくほのめかすというより安きに流れたような気も……。①の仕事場については、木くずと粉塵が舞う部屋に人柄が偲ばせられる個人的な物は置かないんじやないかなーという気持ちが先に立つて、ほのめかし

たい情報とは何がとつちらかつてることころがありますね。

追加問題

①（空想のダマ）

ふいに部屋が暗くなる。ジュッサは天窓の光を遮る影を認めると、亞麻布を張った木枠に手を伸ばした。開いた窓には羽ぶりのよい鳩が一羽、踵にくぐりつけられた小包をほどく。

小包の中はまた小包であった。赤の封蝋にミミズクの印章を捺すことができるは、ハラスの王が失われた今となつてはただ一人しかない。

王妃セレーの流麗な筆致は時候の挨拶にはじまり、

塔の上からでも垣間見ることのできる四季の移ろいと渡り鳥たちの群れを語り、アンテ川の下流で始まつた小麦の収穫に触れ、ジュッサ卿と民の幸福を祈る結びで終わっていた。

王妃セレーは筆ままで知られる。ペル王が帰らぬ人

となつた二十年前も、王は繁く、戦地から彼女と手紙を交わしていたという。東の国境へ文を届け、王都ハラセナへ戻る徒步数週間の旅を、伝書鳩は一息で飛んでいた。

当時の混乱のなかも、伝書鳩は彼女と共にあつた。暗殺を恐れて人通りの多い王都から彼女を離し、堅牢な山あいの城塞に移したときも、伝書鳩の群れは鳩舎なくとも彼女に付き従つていたのだ。

羊皮紙が握りしめられて皺と刻む。ジュッサが訊ねた、東の国境の防人と文をやりとりしているのかという問いは、丁寧に無視されていた。

王都に戻ること叶わず、王妃としての暮らしはのぞむべきもなく、あたかも伝書鳩だけが彼女の慰めのようだつた。ジュッサの知らないところで辺境の諸侯と文を交わすことは、いたずらに國の——王の空位が二十年続く国において、許されるものではない。それ

はジュツサの護国卿としての矜持であった。

ジュツサから発されるかげろうのような怒気を察したのか、伝書鳩が唐突に羽を羽ばたかせた。浮き足だつてジュツサの胸にまともに飛び込み、反動で天井に跳ね上がる。ジュツサが倒れた振動で木枠が倒れて窓を塞ぐ。予期せぬ形で出口を見失った鳩は部屋を跳ね回り、ペンを、インク壺を、水差しを倒し、石畳の上に積もった埃を舞上げる。

「この——」

小さな鳥の動きは、鍛えていても初老にさしかかった男の手よりも遙かに敏捷であった。ジュツサは駆け回つたが、椅子につまずき、逆に蹴倒し、段々動きが悪くなる。部屋の調度が物取りにでもあつたような姿になりかけてようやく、物音を聞きつけて衛士ネサルが駆けつけてきた。

「ご無事ですか!? 護国卿——」

「ドアを開じろ!」

わけもわからず扉を後ろに閉めたネサルは、荒れた部屋と、部屋の中央に陣取る鳩の姿に目をしばたかせた。

「そいつを捕まえろ!」

軽装の若い衛士はさして苦も無く鳩を両手に収めてジュツサを振り返った。

「王妃の伝書鳩じやないですか。送り返すのでは?」「暫くこちらで預かる。王妃には暫く手紙を遠慮していただく」

「お言葉ですが、王妃が手紙にこだわるの気に掛けるなら、王都への帰還を許され得はいかかですか?」

あんな場所、人より鳥のほうがよほど頻繁に行き交うでしょうよ」

ジュツサはネサルを見る。この衛士は若い。二十年前の混乱を知つていればそのようなことは口にしまい。

「あの塔は城塞だ。あそこほど守りの堅い土地はない」

憮然としてジュッサは言った。

手紙だけが王妃の問題ではない。塔の周りにもあつた。ある者はネズミの影とい、ある者は野犬とい、熊が徘徊していたとも、大きな蛾だとい、ある者は蜘蛛だと言う。上がつてくる報告は要領を得ない。

一体何なのだ？

ジュッサ卿の奇立ちは頂点に達しようとしていた。

王妃の塔にたむろすのは虫か、獸か。どちらであつても、ただの野の虫や獸と無碍にするには懸念があつた。虫の邪法を使うエンネディの手であるかもしけず、ハラスに拭いがたく残る獸の影を残す女であるかもしれぬ。

民の間には秘されているが、二十年前の遠征がどう終わつたかをジュッサは知つていて。からうじて戻つ

てきた者たちは息も絶え絶えに述べたのだ。耳に障る甲高い羽虫の飛行音と、鋭い一刺しに遅れて手足が痺れてくる。帰らぬ人々は命を落としたか、あるいは彼らの巣へと連れられたのだ。ペル王がどちらの運命を辿つたかは、エンネディにしか分からぬだろう。

夜陰に紛れて鳩を出せば、どんな手紙も届けることができる。エンネディに内通することも。もし王が生きていれば、王妃はエンネディに見返りとしてハラスだつて差し出すことができるのだ。

そして——もうひとつ、ハラスに根付く獸の伝承が絶えていないならば、もつとまずい。邪法を極め、蛇に狼に転ずる女たちを調伏したのは七女神の宣教師たちの長年の労苦であった。いまなお、獸と語らい、獸に変じ、緑の大地を歩いた國母の伝承を完全には拭いがたい。鳥に変じて彼らに混じり、ミミズクの助言を聞き入れて野を開いた女の姿は王冠の飾り彫りにも、

みの薄皮の向こうに、満足げな色があった。

宮殿のタペストリにも残る。二十年前に王が姿を消した後、王冠を鋳溶かして七女神の象りに変えようと進言した司祭の提案をジュッサは受け入れなかつた。しかし今、考え方直す時が来ているのかも知れない。

ジュッサはネサルに言つた。

「司祭を呼べ」

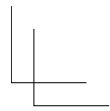
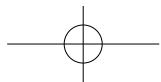
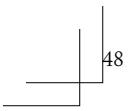
人払いした部屋で。ジュッサはつぶやく。

蟲にも獸にも、ハラスの地は渡さない。緑ゆたかに果樹の実り、畑に黄金の穂の連なるハラスの地は、七女神の恩恵を賜つたひとこそが統べるにふさわしい。獸のかげを色濃く残す女たちから影を払い、光をもたらさねばならぬ。

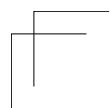
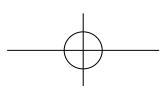
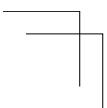
ドアが開き、重い櫻の扉を開けて、分厚く裾の長い正装を引きずつた司祭が入つてくる。

何故ジュッサがここに彼を呼んだのか、司祭は訊ねるまでもなくわかっているのだろう。司祭の柔軟な笑

詰
め
込
み
と
跳
躍



48



※短編小説形式の表示サンプルです。

※

六章改稿

人称と時制

現在形、三人称より

(1216
→ 603)◆
ブーテー

歩脚の第一対は篠巻と糸車にかかる。篠巻から伸びた糸は緊張を爪先に伝えて糸車に向かう。欠けた爪の隙間を避け、伸びる撚糸を紡錘スピンドルが巻き取る。蜘蛛の爪も体節も色あせてひび割れている。時間の糸をぎ叙事詩を編む蜘蛛の老婆は、若かつた頃も美しかつた頃もなく、ただ婢女はしめとして高き神々に仕える。

第二対は大釜を揺らし糸玉を掬う。骸から煮溶けた感情が緋に紺碧に黄銅に糸を染める。鮮やかな糸玉を除けば、釜底に凝りが残るのみ。

水面は老婆の代わりに若い女蜘蛛を映す。大釜に溶けた記憶がありえぬ過去を像に結ぶ。蜘蛛の女王は銀

嶺を背に告げる——この地は我らのものだ。輝く鎧を蜘蛛の糸が絡め取る。神々にも渡しはしない。それは凝った意思、綴られぬ物語だ。今なお老婆に残る炎

であつても。

老婆の第三対も第四対も動き続ける。第三対が乾いた糸玉を掴み、綴織の枠の裏側へ、縦糸の横に連ねる。第四対は横糸を通し、爪で図柄を整える。怒りの緋、悲哀の藍、祝福の黄銅が神々の勝利を描く。

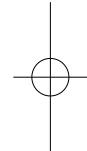
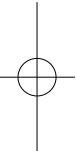
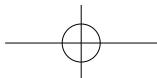
第二対の爪先が型枠を滑り、大釜の薬湯が滴る。図柄はそのままだが色は翳る。沈んだ緋と黄銅は山間を焦がす炎と煙だ。輝く鎧が千切れた歩脚の上を歩く。遠くに勝利が言祝ぎ、近くに呻き声が響く。

老婆の物語は叙事詩はない。それでも、過去なき蜘蛛の爪先は絶たれた語りに濡れている。

いまも、いままでも、これからも。

六章テキストは見返すと結構無駄というか勢いで書いたせいで文章が蛇行してゐるな……という印象があつたので磨きの余地がある気がしたので選びました。今

までろくに全然やつたことのない作業なだけあって大変でしたが、ビフォーアフターで締まる感覚というのを小品でも味わえ、推敲への苦手意識がちょっと減った気がします。



文体操舵録

2022/07/13 初版発行

著者 あやふや
発行 Telecocoon, Ltd.
<https://telecocoon.netlify.com>
組版 vivliostyle-jppb
<https://github.com/ayhy/vivliostyle-jppb>

電子版なので乱丁落丁の代わりに誤字脱字があります。ご容赦ください。

